

Title	昭和廿一年度春期鎌倉見學報告
Sub Title	
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.1 (1948. 1) ,p.134- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480100-0134">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480100-0134</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

切支丹傳道の方法に就いて

吉田小五郎氏

六月十二日 午後二時、於九番教室、(第

三百五十八回例會)

賤民猿樂衆法師の發生について

河津富美子君

印度に於けるパキスタン問題について

小埜 學君

十七世紀英國に於ける支那茶の使用

竹田 龍兒氏

義塾九十周年式典と新聞記事

間崎 萬里氏

六月二十六日 午後二時、於八番教室(第

三百五十九回例會)

安政年間に於ける日米修交とキリスト教

山下 淳君

支那商人ギルドの發生について

永井 哲明君

中世思想の形成と先驗的歴史哲學の傳統

神山 四郎氏

七月十日 午後二時、於八番教室、(第

百六十回例會)

詩經にあらはれたる巫をめぐつて

伊藤 清司君

### 昭和廿一年度春期 鎌倉見學報告

戰爭の爲中絶してゐた三田史學會の見學旅行も、愈々昭和二十一年六月十九日の鎌倉見學を以て再び始められるに至つた。

當日七時五十分、品川驛横須賀線下り「フォーム」上に一同集合する。御指導下さる伊木先生始め、間崎、今宮、淺子、河北の教授、先輩及び學生廿數名の多人數であつた。八時十二分發の電車にて出發し、九時に北鎌倉驛に到着した。此所で湖南在住の學生諸君と合流する。

直に、驛上の圓覺寺に向ふ。途中伊木先生より御説明を伺ひ乍ら參道を進んで行く。現在では境内は縣道、鐵道の爲に中斷されてゐるが、昔ははるかに廣かつたさうで、其の庭園の配置は左右對稱になつてゐるとの事である。鎌倉五山の第二に當り、弘安五年北條時宗の創建にかかり、宋僧無學祖元(佛光國師)を開山とする。山門を入り、時節がら増産のため耕作されてゐる佛殿跡に今昔を偲びつつ舍利殿に至り、伊木、淺子兩先生より夫々御説明があり、且つ内部をも參觀するを得た。この建築が鎌倉時代に於ける禪宗建築の代表作として著名であることはここに喋々するまでもない。此の時近山教授と學生數名が参加される。これで行は廿一名となつた。此の頃より空が曇つて小雨を催す。止むをまつて時宗の廟所に參詣し、佛殿跡で記念撮影の後、十時頃圓覺寺を發して建長寺に向ふ。途上、東慶寺門前にて縁切寺の昔話を伺ひ又最明寺人道時頼の墓を遙拜し、十一時近く巨福山建長寺に至る。同寺は北條時頼の創建にかかり、宋僧蘭溪道隆(大覺禪師)

を開山とする。鎌倉五山の第一位に居り、地獄谷と稱する刑場の跡に建てられたと言ふ。

先づ方丈にて、

一、和漢年代記(紙本墨書) (國寶) 貳冊

附 元祿寫本 壹冊

一、開山禪師頂相(絹本着色) (國寶)

自畫自讚と傳ふ。 壹幅

一、大覺禪師法語規則(紙本墨書) 貳幅 (國寶)

一、大覺禪師諷誦文(國寶) 壹幅

を拜見する。この外の多數の寶物類は尙疎開中として拜見出来なかつた。晝食後元祿五年の銅碑の立つてゐる方丈の庭園(史蹟名勝指定)を見る。當時の庭園も圓覺寺同様對稱型様式である。

方丈前にて管長菅原時保師にも加はつて頂き記念撮影行ひ、更に御佛前にて淺子先輩の御説明を受けてから、折悪しくまた降つて來た細雨の中を開山堂に向ふ。元氣な者は更に難路を攀ちて裏山の「大覺禪師、佛光國師の墓(共に國寶)」に詣る。共に一米ばかりの小塔であるが、鎌倉時代の特色を示した代表的なものである。

夫より鶴岡八幡宮に向ふ。裏參道より社殿前に到着したのは二時頃であつた。參拜後、廻廊の陳列は疎開のため見られないので大公孫樹の脇を通り、若宮に參拜する。初め源頼義が石清水八幡宮を鎌倉に勸請したのは現在の大町辻町であり、それを頼朝

に移し、更に建久二年三月焼失のため現在の地に本殿を移したのである。

社務所に請ぜられて、當社所藏の古文書類を見せて頂く。ここでも疎開中で、拜見した原本は澤山ではなかつたが、室町前後の社領關係の文書、其他有益なるものであつた。また「天正十九年五月十四日増田長盛」の署名のある、國寶「鶴岡八幡宮修理目論見繪圖」や有名な「鶴岡八幡宮社務職記録」などを拜見することが出来た。

折から天氣もすつかり恢復し、氣持よい初夏の日が照り出して來た。境内には聯合國の將兵の姿も見える。かくて附近の鎌倉國寶館に入り、書畫、彫刻その他貴重な陳列品を巡覽して、三時頃、同所にて解散した。

最後に戦争後の整理其の他の繁務中、特に見學の便宜を與へて下さつた八幡宮、建長寺その他の皆様に篤く御禮を申し上げる次第である。  
(森岡敬一郎記)

### 昭和廿一年十月十七日神嘗祭の朝は天候に恵まれたが、品川驛頭ではうすら寒かつた。伊木先生外六名は八時湘南電車品川驛を出發、京濱間の工場地域を抜け清淨な空氣の金澤文庫驛に降りたのは九時五十分頃であつた。そこで一行に湘南方面からの參

の途中、先生は文庫の由來等と話された。北條實時の別荘に建てられたもので鎌倉末、足利時代には相當数の書物を有したが後散佚して江戸期にはその多くが江戸城内に移され、後に紅葉山文庫となつた。其等が今は内閣文庫をはじめ、圖書寮、久原文庫等にも分藏されてゐる。なほ駿府政事録や林羅山の丙辰紀行等を見れば當時の狀況が解ることなど説明せられる中に、稱名寺の赤門をくぐつた。本堂の横に萬里集九の移植したと傳へらるる古梅樹を眺め、『梅花無盡藏』の著者を偲んだ。又鐘樓の梵鐘の銘には『正安辛丑仲和九月大檀那入道正五位下行前越後守朝臣顯時法名』とあり今度の戦争にも供出を免れた逸品である。次いで金澤文庫寶物館を見學することになり、館員石原氏の説明を患はした。陳列品の主なるものは未だ疎開より歸らないとの事で、複製品及び模造品が多かつたが、金澤文庫の印、釋迦立像(半身裸ヒ衣紋の線の鬘波様式に特徴あり)僧形八幡神像、十二神將畫像、金澤文庫古圖等は我々の目を惹いた。又同氏は、陳列品解説を終ると、稱名寺の概略を話された。元享三年に本如房 加七堂の境内となし、結果に(梵字)阿字の池(今の山門の位置)をめがらした。その頃は今の境内より數倍廣大で、現在の寶物館の地が實時の別荘であつた。又宗派は始めは西大寺末寺にて眞言律寺であつた

と。陳列室の見學を終つて、史料調査室に移り、そこで石原氏は我等の求めに従つて快く史料を出して見せられた。その主なるものは次の様なものであつた。

(A)本尊彌勒菩薩胎内發見品 一枚  
(一)千體刷佛 (雁皮紙版畫) 一卷  
(二)叡山版經 一卷  
(三)妙法華經 (寫經) 一卷  
(四)願文 一卷  
署名に「平安女」とあるは實時夫人か  
(五)婦人遺髮 一基  
(六)小舍利塔 (木製) 二片  
(七)筆及筆記具(鉛筆形木製) 二片  
(八)稱名寺僧衆宛文書(弘安元年の記あり) 二片  
(九)其他天正八年九月廿二日申亥の文書、後世追加として納入せしものか  
(B)宋版大藏經 一通  
(C)兼好法師(三十四歳)筆消息、懸紙共  
(D)連歌集 (用紙引合せ)  
「點阿溪元弘三年十月廿三日夜云々」とあり中に「卜」とあるは占部兼好の頭文字ではなからうか。  
(E)日蓮(十七歳)筆「聖院眞言血脈」 一綴  
(F)手習覺往來 (鎌倉時代) 一綴  
(G)東鑑斷簡 (鎌倉末期頃) 一冊  
(H)今鏡斷簡 ( ) 一冊  
(I)假名具注曆